



比賣嶋考

ル 3  
3333





1111

Handwritten text in vertical columns, enclosed in a blue border. The text is extremely faint and illegible.

Blank page with faint ghosting of text from the reverse side.



門 九 3  
號 3333  
卷



かろのくゝ國境り於此海をよめぬ  
島に於て記此伊耶那美年々  
つらむを治す際りの世に流し女島  
なれども一日一國に軍事を裁る  
年々月々かろかろかろと飛め  
島をたりを河原もせり志は伊耶のり  
不飛鳥此あるに傳り内の説を

○姫島考序

一

早稲田大学図書館  
24.4.11  
購 入 本





と云解ありし神代のむかし  
初ちとせ此後より心ちろぬ氏  
をくしおる功もろん河をけり此  
をちろぬ氏とて大族姓より世を氏を  
申す河津が事とて通く西の國に居る  
家ありし中世の世をれり大友  
氏に傳はりし村少事氏おきぬ

たりし今も今も神代に傳はり世に  
たれつとてをちろぬ氏とて  
子に傳はりしは常より世を傳はり  
ありし書きてその世をせしむる  
島もち世の心もちみちる世に  
おのれいひしむぬちの國人も  
ねみし世の心もちみちる世に



為の乞ふふふふふはしをこゝろめり  
何まをわづつけぬぬいて深の  
と名やいふ年此やよしいふ末国悪人  
能計七中何まうらいつのまじいえを守  
むらそふゆのゆけをりあふおつる  
あれ乃好ふ末と美しき〜天

はつたてぬに女中御殿にわたり

木のれと何ぞ殿ふはまのち根山幾が  
大江戸なる氣吹通屋れ子田大人の  
をへ子ふく殿の御供してか〜ま  
らあるよつぎの中此は常崎考をさる  
大人平一忍梅まわぬせいで傳ら  
小室色何ともむと云乃御定な〜書と  
いひはが〜らなるよ正義の久るり



つき事多に法と云

豊後國梓築の殿人小串重威  
忠一吾師の古事記傳の巻の  
得たれざりたる日女崎乃左と云  
詳の考へ記しと見せ給へ事  
いさういさうと云

比賣神の身字は比賣の右記の

ふ小野は比賣の人を以て一巻 鳥亂  
少の記類事の中揚へたは少の  
ういさうと云

云乃兼比賣の巻の右記の交は  
わの比賣の巻の右記の交は  
少の記類事の中揚へたは少の  
やうな事ありて記して事



くしものかゝりごとく  
天保二年壬辰の御正月七日

大倉重威

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '大倉重威' and '天保二年'）

姫島考 其夫來禮 封於紫園 申於以 為實地也

古事記を見る小。伊邪那岐伊邪那美二柱の大神は。  
うみほせる島は次第。大嶋は次子ヒメビテ女島を生給ふ  
也何里。按ぶる小。大嶋を。周防國大島郡として。伊  
波比洋ハヒナダの東北にあり。女島は。豊後國國東郡にして。  
伊波比洋は西南にあり。其間十四五里を有れば。  
大島の次と何處に能くおぼる。國に小同名の島も  
あり。二神ウミ生カミませるは。疑なく。たゞは姫島と聞え



あり。そは島人れぬる記語に傳へゆも。むうー女神ヒメガミの  
住給ひしとある。姫島とはいふと云へる。女神とハ、  
はち。比賣語曾社神をいふれ。其もく比賣語曾  
神れとは。日本紀垂仁天皇二年れ一書。難波比  
賣語曾社神。且至豐國國前郡復爲比賣語曾社神。  
二處見祭焉と見え。攝津國風土記。比賣嶋乃松  
原者。昔輕島豐阿岐羅宮御宇天皇之世。新羅國有  
女神。遁去其夫來。暫住筑紫國伊波比乃比賣嶋乃

曰。此島者猶不是遠。若居此嶋男神尋來乃更遷來  
停此島故取本所住之地名以爲島號とあり。二記の  
傳り各くそれ御世を異ふれど。應神天皇れ御世。  
このら文字を始ふ。其他の事も於なく渡り來りては。  
風土記或書ある。頃を垂仁天皇れ御世の事をまた  
らして。應神天皇れ御世と傳りある。せはるや。  
其は少あま。この二記れ文を阿はせ考へて。豐後の國  
東郡ある。姫島やぐく二柱神の生給ひし女嶋ヒメシマあると



字或知る者し。但し風土記の文。伊波比上イハヒ子豊國と  
明く。筑紫國と何るふはきき。豊後あらじりとウタガ疑ふ  
人も有ぬるまじき。筑前筑後をたみ筑紫をいひ  
は。い上代の事ありて。風土記の頃は。既ハヤく九國に總  
名とありぬまじ。其心もて記せしむ。筑前筑後を  
内していへ。海あらば。豊國ある事なき。比賣神の  
住給ひし本縁コトノモトも。風土記の文ありていふ。海ありし。即  
今も大比豊後と周防の間は海を。去れて伊波比洋

をいふ。此洋中伊波比嶋といふありて。萬葉集此  
歌を詠えり。

そは十五の巻。周防國玖珂郡ありふの浦ありて。  
大田邊秋庭がよる八首の中なる大嶋。まゝ可  
太比大嶋小嶋ぎて詠める歌ども平。伊敝妣等  
波可敝里波也許等伊波比之麻。伊波比麻都  
良牟多妣由久和禮乎。久左麻久良多妣由久  
比等乎伊波比之麻。伊久與布流末且伊波比



伎爾家牟。と何る是あり。

乃此島より出る洋の名あり。今ハ言便めていはふ洋。いそみ洋。いはふ島。いはふ島形と云へり。上は關より海上五里西南。姫島より六七里むろり東北の方あり。比賣之麻を。今は姫島とかき。比賣語曾神を赤水明神といへり。石は祠あり。むろし女神の居住給ふといふ屋形山より三町むろり海邊は岩山あり。例祭三月三日あり。島人むろり祭あり。

神體は木像ありて。婦人の筆を持ち。齒を染むる容あり。古老は説ふ。元は神體を祠の中より婦人の形にみ彫付ありしといふ。正に傳へたる。赤水明神。其祠の所は岩下より。赤錆の鐵管水流き出。手を拍てむ響小應じて。進る故。拍子水と名づけ。土人を明神は靈水ありといひ傳ふあり。

然る哉俗説なり。此比賣神といふを。眞野の長者といふ者むろり。玉世姫の事をいへ。彼拍子水を明



神の靈水形と云ふ。古一へを知らぬ者の。猥  
多小神像を。加糸柱く像形小造りありて。鐵將付  
石。揚枝柳あどいふ。やをも設け出で名所此證也  
し。皆玉世。姫代舊跡と附會せしもの形也。然るは  
齒をそむる事は。我が國中古より此風儀あれど  
も。いや上代よりはさる事なり。後人の志わざある  
たと疑ひあり。近頃岡藩代唐橋世齋といふ人此  
撰修す。豊後國志にも。垂仁天皇紀也。風土記と成

引きて。比賣語曾神也。姫嶋小阿と記し。これ也。  
委しうら糸は。嶋の名小於神あり。事を志す者な  
し。古一きは嶋人も。此神をむ糸と祭りむ。或いは  
世より。八幡宮を産神として崇め祭る事と。那  
里也。社人あは。有りて。二季に祭典あり。り。是ど。  
赤水明神の祭禮也。三月三日のみなり。八幡宮小ハ  
まの。形く。劣き。と。と。

抑こ此比賣島は。かく正しく比賣語曾の神祠も阿



まば。二神れ生ほせる女島とて疑る記を。鈴の屋、  
大人れ古事記傳ふ。二神の生ませるハ。筑前の海上玄  
海嶋と。肥前の名兒屋とれ間の嶋を處べし。又豊後  
國直入郡れ東北の海ふも。姫島何まこと。此乎は何らじ。  
と云まゝあるは皆たが言り。筑前の沖。肥前れ境までハ。  
此何ありとある。七八十里處とてまされむ。大嶋の次と  
あふるか邪とれ。まゝ、豊後國直入郡も。山邊めて海  
邊ふ何らじ。おは此邊りれ國像を。ちらまける故の

考へ違ひある。撰津國風土記の同文哉。古事記傳中  
二所引きとる。明宮比下あるハ正しくして。主と  
ある女嶋れ下乎は。伊波比乃比賣嶋を。伊岐比賣嶋  
と誤る。おは波の字を波と誤り。比乃二字を脱せる  
本あり。是小心付れ。伊岐比賣嶋を。筑前の島  
那里と説きとる。但し分注乎。伊岐とは。彼女神新  
羅より來て。ま川伊岐島小著き。直乎此嶋小來著る  
故るとあるは。聊とあるのハま。いは聞かまこと。伊岐比



賣嶋をいふ所を解れあるは強ぶを那ら年々の抑  
記傳也。大人れいせ廣く。何くまの書どもを考へ何  
はせそく。生依涯<sup>イケ</sup>王<sup>カギ</sup>力を盡<sup>ツク</sup>されある書ふ一何まバ。  
負氣<sup>オホケ</sup>那く於のまらぐ。かふあくふ論<sup>アヤツラ</sup>ふべき事よ  
あらぬまども。遠ぶ國くは古也は。彼大人といへども。  
かゝ依違ひの形きふ一も何らある處し。さうは姫  
島は。於のま眼前よよく見て知る所あれば。この地  
理れたがひいふ所と。風土記の文は誤<sup>アヤ</sup>まを。知らせり

やしく思ふ也。今は世牙<sup>セヤ</sup>於はさ無を何とせむ。ゆまど  
神世れやぶと形き名所の。世牙<sup>セヤ</sup>う形もまそ。古家人  
あ記<sup>クキ</sup>の口惜<sup>クナレ</sup>くて。かくは記し傳ふ依ふ那年。

大島牙<sup>オホシマ</sup>はまきそく形め一を豊國は  
みちの志<sup>シ</sup>まは依<sup>イ</sup>はまの志<sup>シ</sup>一は  
又れ名字<sup>ナ</sup>天の志<sup>シ</sup>と川根<sup>カネ</sup>をいふは

姫一は依<sup>イ</sup>あくるま牙<sup>ヤ</sup>並ふ嶋も那し  
う依<sup>イ</sup>志<sup>シ</sup>いひまり天れいせ根



文政結八とせりよと一此文月

豊後 杵築藩 小串仙助大倉重威

*(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)*

姫島のつりくをりて詠ある長歌

天地乃始れ何よ神伊弉諾神、いさる人二もりり  
あふ神の百傳よ壱乃八十鳴る人、まをるその  
鳴れ中よ赤高る周防國れ大、考ふは海もて生  
まひ姫島といもひの灘れ入日、はき西も南の  
中に在るよの豊國れららの志、といふか中の  
姫島と云いはき、来る姫一むけ、是を姫  
しはきうはあま、古事あら、他たなは、免



嶋を以て鈴のふり鐘乃終れ鈴の金鐘の  
おやろわく夫人の昔をさうりたる書あり  
赤く固かりやまろ珠一珠事違りたる  
多ふく輪ひは八百丹を杵築の藩の真玉  
初め小串乃をらう漢りけつ  
そふく固防をらうこれ羅中のいぶ光は油  
うへりて定ち多はもとす下始ぬの名は  
お母まゝの神世のこゝに傳へるは

云小娘一海は是を娘一田さる島乃島れ  
おや一ようみとせる嶋の真名子世阿  
おれりの八十年や一と終く之重終れ  
み多重あふ千重あふ下に名なりは名も  
かろろ下と名細く名はくも先や川内女の  
多りの系れはゆきく乳ま一筋を埋れる  
小串れをらうかもまたる書の條、地形乃  
事れ次第と見む人いよと見くたる母の



みー明らち事今ゆのりら八國くも偶へ  
 身てと志のへみ明らち事神世より千世  
 とも〜ぬ名くらば〜姫島

豊前中津人

藤原重名

*(Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side)*

伊吹迺屋先生及門人著述刻成之書目

塾藏版

○古史成文 <small>神代部</small>	三卷	○古史徵 <small>神代部六冊 開題記五冊</small>	十一卷
○古史傳 <small>自初卷至 十六卷</small>	四秩刻成	○古史本辭經 <small>五十一音 義訣</small>	四卷
○神代系圖 <small>抄本 箱入</small>	一帖	○同 <small>小抄本</small>	一帖
○靈能貞柱	二卷	○神拜詞記	一帖
○太元圖說 <small>石摺</small>	一幅	○古道學神号 <small>同</small>	一幅
○弘仁歷運記考	二卷	○神字日文傳	二卷
○皇國度制考	二卷	○祝詞正訓	二卷
○天津祝詞考	一卷	○古道大意 <small>講本</small>	二卷
○皇典文彙	三卷	○童蒙入學門	一卷
○牛頭天王曆神辨	一卷	○鑿宗仲景考	一卷
		○古今妖魅考	三卷
		○大祓詞正訓 <small>抄本</small>	一帖
		○疑字篇 <small>日文傳 附錄</small>	一卷
		○玉多須喜 <small>二 快</small>	十卷
		○五聲大統譜	一幅
		○靜乃石屋 <small>同</small>	二卷
		○入學問答	一卷
		○掛軸料	一枚

○刻成書目

○全



○德行式 <small>石措</small>	一幅	○立言文 <small>同</small>	一幅	○鬼神新論	一卷
○出定笑語 <small>講本附錄</small>	二卷	○悟道辨 <small>同</small>	二卷	○伊吹於呂志 <small>同</small>	二卷
○俗神道辨 <small>同</small>	四卷	○撞木隨	卷	○木匠祖神号 <small>石措</small>	一幅
○赤縣歷代尺圖	一枚	○石措類	數種	○鑿祖神号 <small>同</small>	一幅
○春秋命歷序考	二卷	○武道祖神号 <small>同</small>	一幅	○日女島考	一卷
○宮比神御傳記	一卷	○天滿宮御傳記略	二卷	○叶古略	一卷
○古學二千文	一卷	○草木撰種錄	一枚		

先生の著書凡て百部卷數千卷に迫し右全書目より於其書等の大意を別  
小記せる著述書目集を見て知るを門人生田固秀 河内盛征等記

○神徳畧述頌 一卷 ○古道訓蒙頌 一卷



